



この1冊だけでさまざまながんに対応できる

評者 | 上田剛士 洛和会丸太町病院 救急・総合診療科部長

ジェネラリストにとって心強い味方ができた。『ジェネラリストのためのがん診療ポケットブック』である。2人に1人はがんに罹患し、3人に1人はがんで死亡している時代において、「がん診療」はジェネラリストにとって避けることのできない分野である。患者・社会からのニーズも高く、この分野に臨むことはやりがいがあることは言うまでもない。その一方で、がん診療は壮大な学問であり、ジェネラリストが挑むにはいささかハードルが高かった。本書では、がん診療のメインストリームであろう薬物療法には、あえて深く踏み入らないことで、このハードルを一気に下げた。その代わりに、ジェネラリストが知りたい内容が盛りだくさんとなっており、がん薬物療法を普段行っていないジェネラリストのために特化した1冊である。

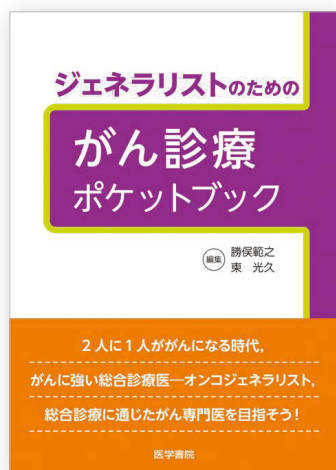
たとえば、がんの予防については患者からの質問も多く、ジェネラリストにとって知らなければならない知識の1つであるが、「がんの19.5%が喫煙による」「適度な運動はがん死亡リスクを5%下げる」などの具体的な記述は患者指導に大いに役立つであろう。また、がんのリスクとなる／リスクを下げる食品にも言及されている。がんを疑う徴候に関しても、たとえば Leser-Trélat 徴候は3～6カ月以内の急性発症で痒痒感を伴うことが脂漏性角化症との違いであることなど、臨床的に重要な知識が詰め込まれている。

“オンコ・ジェネラリスト”へと昇格させてくれる

コンサルテーション先が定まらず対応に困ることも多い「原発不明がん」や「高齢者のがん」「遺伝性がん・若年性がん」についても章が設けられており、この1冊だけでさまざまながんに対応できる。がん患者とのコミュニケーションやアドバンス・ケア・プランニング、緩和ケアに関してもカバーしている。がんサバイバーケアの記述も充実しており、いつ何によってフォローすべきかを教えてくれ、ジェネラリストを“オンコ・ジェネラリスト”へと昇格させてくれる1冊と言える。

がん薬物療法に関しては、レジメンの詳細は紹介されていないものの、免疫チェックポイント阻害薬を含む薬物療法の副作用管理についてはしっかりと記述されている。薬物療法中のがん患者であっても、併存症や合併症のためにジェネラリストあるいは臓器別専門医が診療する機会は多いからである。がん薬物療法を普段行っていないジェネラリスト／臓器別専門医はこの書籍をポケットに忍ばせておくことで自信をもってがん患者を診療できるようになるだろう。オンコロジックエマージェンシーについても記述されているので、救急や一般外来の初療を担当する医師にもお薦めだ。

G



ジェネラリストのための がん診療 ポケットブック

勝俣範之、東 光久＝編

定価：4,180 円（本体 3,800 円＋税）
A6 判・288 頁／医学書院／2022
[ISBN978-4-260-04922-1]